

下駄先生ありがとう

私は気が弱く、人前で話しかけられてもモジモジして、はっきりと口に出して答えることができない内気な小学4年の女子でした。体が弱く、運動も苦手で、図書室で本を読み、いろいろ空想するのが楽しみでした。今から61年も前のことですから、皆貧しく、大人たちは朝から晩まで身を粉にして働き、物資も豊かではありませんでした。交通機関もリヤカーや自転車で、バスは贅沢だと減多に乗ることができませんでした。

そのため、近くの小学校での行事の運動会と学芸会は、大人も子どもも大いに楽しみにしていました。運動が不得手な私は、運動会の練習が始まると憂鬱で、はちまきを見るのも嫌でした。そんな私が、学芸会でイソップ物語の「金の斧と銀の斧」の人形劇をやることになり、私は正直な木こりの役に配役され、不安でいっぱいでしたが、小柄ながらも大きな声のT君とペアで懸命に練習に励みました。劇が終わると体育館いっぱいの見物客は、大きな拍手を送ってくれました。ぼう然としている私に担任のM先生（渥美清に似ている通称「下駄先生」）は、「やればできるだろ？」と言いたそうな顔で頭を撫でてくれました。人形は操っても、布の台に私の姿は隠れて、皆には見えなかったから恥ずかしがらずに頑張ることができ、T君の声も体育館によく通り大成功でした。

このことをきっかけに、「やればできる」と自信がつき、友人も増え、学校が楽しくなりました。劇の配役は、おそらく先生が決めてくれたのでしょう。

私は、今も先生に感謝して、元気に頑張っています。

甲斐 美穂子

（一般）